

ハイリスク・ハイリターン

IPMU 機構長

村山 斉 むらやま・ひとし

探査機「はやぶさ」が小惑星イトカワへの7年間の旅から帰還したことに感動し想像力をかき立てられた人は多いでしょう。今号では IPMU の Ed Turner が「はやぶさ」のプロジェクトマネージャーである川口淳一郎さんにインタビューします。彼が大きなリターンを期待して高いリスクを覚悟し、勇気をもって「はやぶさ」を提案したことがわかります。そして見事にリターンしたのです。数々の技術的な問題を乗り越え、イトカワの微粒子を持って帰還しました。研究の面では、太陽系形成の歴史について知見が得られるでしょう。しかし「はやぶさ」が大気に突入したときに私たちが大喜びした理由は、ミッション・インポシブルが遂行された達成感の感激だと思えます。

実際、科学研究はドラマに満ちているのです。研究者のステレオタイプはこんな感じでしょう。瓶底眼鏡をかけ、いつも白衣をまとい、感情に乏しく無表情で、社会性がなく、危険な化学物質や微生物だらけの実験室を機械的に動き回り、規則を厳格に守って毎日同じパターンで生活する。

しかし、実際の科学者の仕事の様子を観察すると、皆さん驚かれます。リスクを覚悟で未開拓の分野に乗り込み、行き止まりに突き当たってがっかりし、トンネルの向こうに光が見えて興奮し、友達と一緒に笑い、何が正しいのか議論になり、難しい作業にどっぷりとはまり、全く新しい方向にたまたま気づき、世界のどこかのライバルと競争し、

しばしば仲間とチームで仕事する。そして科学は完全にグローバルです。会議、ワークショップ、スクール、講演と、どこに出かけていっても、近い分野の仕事に取り組む新しい友達が見つかります。

野本憲一主任研究員の解説でも、彼が、当時未開拓の地であった超新星爆発の謎の解明に乗り込み、今は標準になった理論を打ち立て、世界中の共同研究者と自分の理論の検証に取り組み、それが全く予想しなかった暗黒エネルギーの発見に繋がった様子を読むことができます。

柏キャンパスの一般公開2日目、台風にもかかわらず大勢集まった聴衆に、野本さんはこの物語を講演しました。皆さん魅了されていたようです。一般公開の初日には、千葉県のマスコット「チーバ君」が私のオフィスを訪れ、素粒子がどのようにして相互作用するか、私の解説を聞いていきました。そのときの写真をご覧下さい。

